

朝コーヒーを飲む普通の生活の世界政治 ——20世紀ドイツ文学の視座から——

東京大学名誉教授 臼井 隆一郎

■ はじめに

ドイツ文学者がコーヒーのことを書いているので、おそらく趣味的にやっているのだろうと思われていると思います。そうでもなくて結構真面目にやっているのです。今日はわたしの専門分野のことを存分に語ってよいとのこと、喜んでやってきました。

わたしは卒論や修論でアンナ・ゼーガース(1900-1983年)という現代作家を扱っていました。彼女の作品を読むためにドイツ語を勉強し、結果、ドイツ語教師という職業を選びました。わたしの知る世界は彼女の通過した世界です。わたしの発想やものの捉え方は基

本的に彼女の文学から来ています。

ゼーガースはユダヤ人でしかも共産党員です。となると、ナチス第三帝国時代のドイツにいられるわけがなく、海外に亡命し、その後東ドイツに帰ります。そんな歴史の変遷でわたしは社会主義海外亡命文学の研究者であると言えるわけですが、1990年には東ドイツも地図から消えた国になってしまい、いうなれば「どこにも居場所のない」日本のドイツ文学研究者となりました。

■ 20世紀のドイツ文学の視座 ——ナチズム、亡命

アンナ・ゼーガースはヒトラーの政権獲得と同時に国外脱出。最初はパリに住み、『第七の十字架』(1942年発表)という反ファシズム抵抗亡命文学の代表作を書きます。物語は強制収容所を脱走した7人が捕らえられ、プラタナスの木に横木を打ちつけた十字架に架けられ、処刑される顛末を軸としています。しかし7人目の男は逃げ切ることに成功します。SS(ナチス親衛隊)とゲシュタポと犬に追われる異常な生活の中で、彼、ゲオルク・ハイスラーはドイツの「普通の生活」の光と耀き^{かがや}に目ざめていきます。

かつての彼[ゲオルク・ハイスラーのこと]はそれ(普通の生活)をどんなに軽蔑したとか。ここで待っているかわりに、なかへは行って行って、肉屋の職人になり、あるいはこれらの家のどれかの客になりたい。彼はヴェストホーフェン[強制収容



アンナ・ゼーガース
By Bundesarchiv, Bild 183-F0114-0204-004 /
Spremberg, Joachim / CC-BY-SA 3.0

所 にいたときは、街というものを別の
ように想像していた。どの人の顔、どの
舗石にも汚辱のあとが見える、人びとの
足どりにも声音にも、子供たちの遊びに
さえ、悲しみのかげがあると信じていた。
ここの通りはまったく静かで、人びとは
みな満足気にみえた。「ハンネス！フリー
ドリヒ！」と一人の老婆が洗濯屋の上の
窓から、婚約者と散歩しているらしい二
人の SA の青年を呼んだ、「上がっておい
で、コーヒーが湧いたよ。」

『第七の十字架』山下肇・新村浩訳、河出書房新社

ドイツの人々はナチス政権のもとで呻吟し
ているものだ、と強制収容所を脱走する前の
主人公は考えていたのですが、実際に強制収
容所の外に出て眼前に広がるのは平和な生活
の光景です。通りを歩くナチスの軍服を着た
青年に母親が声を掛ける。ごく普通のパン屋
さんにごく普通に入って行ってパンを購入す
るといった生活が、いかに素晴らしいもので
あるかを描いているわけですが、その総仕上
げは「コーヒーが湧いたから早く上がってお
いで」という叫ぶ母親の優しい声。故郷のコ
ーヒーが今日の話の話題です。

主人公は脱走した最初の夜をマインツ大聖
堂で過ごします。翌朝、大聖堂を出ると露店
が開いて、菓子とコーヒーの香りが漂い、住
居の階段部でもコーヒーの香りがする。扉の
向こうでは、子供たちのあくび、目覚め、そ
してコーヒーを挽く音とともに、いつもの一
日が始まる。大聖堂前の広場というのは子供
時代のゼーガースの遊び場であり、ここに描
かれるのはゼーガースの生まれ育った故郷の
匂いです。「普通の生活の光と耀き」のメとも
も言うべきコーヒーの香りが今日の話題です。

■ パリからマルセイユ、メキシコへと亡命

ナチス・ドイツに対するフランスのいわゆ

る「奇妙な戦争」⁽¹⁾のあと、早々とパリは陥
落します。パリで『第七の十字架』を書き上
げていたゼーガースは再び逃げることになり
ます。パリにいるドイツ人亡命者たちの逃走
経路は二通りあって、一つは陸地沿いにピレ
ネー越えでスペインへ行く道。もう一つはマ
ルセイユに行って船で大西洋を渡る方法です。
マルセイユから先の目的地は、社会主義的な
国策をとって亡命者を受け入れていたメキシ
コです。ゼーガースはマルセイユで『トラン
ジット』(1943年発表)という小説を書きます。
外国に亡命しようという人間が、途中の国で
通過ビザを手に入れる困難を描いています。
現在のドイツは、EU 内の国々が難民危機で
揉めるなか、メルケル首相が難民申請者に国
境を開放しています。移民反対を唱える人々
はドイツにも多くいますが、ナチス第三帝国
の時代にスウェーデンに亡命していたブラン
ト首相らにより戦後の体制をつくり直した国
であることの記憶が薄らいでいるのを危惧し
ます。

亡命文学者とはありていに言えば、それぞ
れの土地のカフェに入り込んで小説を書き続
ける生活をする人のことです。『トランジット』
ではマルセイユのカフェが舞台となり、ゼー
ガースが始めて食べたピザも登場します。ド
イツのコンディトライ・カフェ文明に育った
ゼーガースは、ピザを見てケーキだと思ふ。
しかし見た目に甘そうなピザを頬張ると甘く
はなくピリッとくるのに驚いています。おそ
らくドイツ文学に初めてピザが登場する場面
でしょう。

それはともかく、ゼーガースはマルセイユ
から船に乗り、大西洋を渡ります。同じ船に
は、ブラジルに向かうレヴィ・ストロースも
乗っています。『悲しき熱帯』(1955年発表)の

(1) 1939年9月のドイツ軍によるポーランド侵攻の後、
1940年5月のフランス侵攻まで、ドイツとフラン
ス・イギリスは戦争状態にあったにもかかわらず、
陸上戦闘は皆無に近かったため、フランスでは「奇
妙な戦争」と呼ばれた。

世界、別名コーヒー・ベルトの世界がヨーロッパ人の意識に上ってくる時期でもあったわけです。ゼーガースが向かうのも別種のコーヒー・ベルトです。西インド諸島を通過する船が寄港する島々によって使われる言語が違う。スペイン語、英語、フランス語、オランダ語。ゼーガースは、ヨーロッパ諸国の植民地であるこの世界の成り立ちに関心を引かれます。

彼女はこの頃、カリブ海の物語としていくつかの短編を書いています。『ハイチの宴』『絞首台の光』『ガルデループの奴隷制の再導入』などはフランス革命期の奴隷叛乱とハイチの独立を背景とする作品です。嗜好品というのは、世界的に珍しいもの、貴重品を移入して味わうだけではなくて、大量消費が背景にある。そのための大量生産に対応するために奴隷労働が行われています。プランテーションを脱走した黒人は犬に追われ、捕まって処刑されれば海に投げ捨てられ魚の餌となります。いわゆる先進ヨーロッパ諸国の嗜好品を生産する西インド諸島の黒人は犬や魚の餌として、いや、主食としてと言うべきでしょうか、食べられているのです。フランス革命が自国でうたいあげた革命と人権カタログが自国においてさえ十分に補償されていない時代に、ロベスピエールはハイチから独立を目指す黒人労働者を国民議会に招いていたのです。この歴史に創作意欲を掻きたてられなければ、社会主義作家などとは言えません。

■■ 『死んだ少女たちの遠足』

ゼーガースはメキシコで7年間亡命生活を送ることになりますが、途中で母親が強制収容所（ポーランド、ルブリン）に送られて死んだという知らせが入り、その頃、自分も原因不明の交通事故で重傷を負います。メキシコでトロツキーが暗殺されるような政情不穏な日々です。その怪我も回復に差し掛かった頃、彼女は病院を抜け出し、意識朦朧のままメキシコ

の山野を歩き回るうちに、昔、ギムナジウムの女学生としてライン川のカフェにクラス遠足に行った時の記憶が蘇ります。（ドイツの遠足の目的といえば、基本的にカフェです。）ゼーガースは、故郷から遠く離れた西の果てで母の死を知り、自分も病気で疲れ切っているわけですが、そんな彼女にとって昔の少女達の遠足の光景は、心から元気づける作用を及ぼします。ライン河畔のカフェで、彼女をバルサムのように力をみなぎらせてくれるのが、漂ってくるコーヒーの香りです。

しかし時代は、この少女達の上に影を落としています。このあとの第一次世界大戦、ワイマール共和国、ナチズムの台頭にもなっていて、彼女たちはばらばらに引き裂かれていきます。遠足の引率をしていた先生が、生徒の一人にアカだと密告されて強制収容所に送られる時代が迫っています。

しかし今はまだそんな気配を微塵も感じさせない少年少女達の集う平和な一時。そこにはあのマインツのコーヒーの香りが漂っています。アンナ・ゼーガースの名作短編、『死んだ少女たちの遠足』（1946年発表）です。

■■ 19世紀後半、 世界列強の仲間入りを果たすドイツ

ドイツの「ごく普通の生活」に絶対不可欠なコーヒー豆はいったいどこから来ているのでしょうか。

先進ヨーロッパ諸国はどこもコーヒーを飲んでいました。フランス、オランダ、ベルギー、イギリスはコーヒー植民地を所有している。なぜドイツだけが輸入品のコーヒーを飲まなくてはならないのか。植民地所有に関してはドイツは遅れてきた帝国主義国です。ヴィクトリア湖やローデシアなど、アフリカの山や湖、地域に名前をつけて自分のものしていくヨーロッパ諸国のなかで、ドイツだけは植民地を持っていない「もたざる国」です。ドイ

ツ帝国成立(1871年)直前に、国民1人当たり年間消費量(液体として飲んでいる分)が2.2リットルというデータがあり、以降さらに消費量が増えていきます。コーヒー中毒にかかったドイツから見れば大きな不公平があると感じられたわけです。

ドイツは普仏戦争でついに憎っくきフランスに勝ち、ドイツ帝国を作って、世界列強の仲間入りを果たしつつありました。普仏戦争後の1870~73年はグリュンダーヤーレ(泡沫会社乱立時代)といえます。新たな企業が立ち上がって狂乱状態です。ヨーロッパ的水準で見るとベルリンなんて誰も聞いたことがない片田舎の小さな街が、首都として急激に強大化します⁽²⁾。経済活力を支えているのはジーメンス(1847-)やAEG(1883-)などの電気産業であり、またルール地方の石炭鉄鋼地帯での利害がドイツの欲動を支配していきます。

ドイツのルーツは農業国というが、その農民は「土地なき民」です。ドイツは人口問題と土地不足を抱えて近代を迎え、他国と同様、植民地を求めます。ヴィルヘルム2世(在位1888-1918年)が出てきて、それで植民地獲得競争、侵攻露政策を取り始めます。ブラジルやエクアドルやメキシコといったドイツ人の植民が進んだ国々の他に、問題はアフリカです。アフリカはヨーロッパ諸国の植民地帝国主義に浸蝕されていて、新たに狙える場所は限られています。ドイツの選択した植民地獲得行動の起点となるのはザンジバル⁽³⁾、宿命論的な出発点です。

大西洋を使う奴隷三角貿易はアフリカ西海岸を起点にしているため、ザンジバルはほとんど登場しません。しかし、ヨーロッパ側からでなくイスラーム世界からみると状況は違



います。古来の先進地イスラームはアフリカから奴隷を入れており、その拠点となるのがザンジバルでした。しかしドイツがザンジバルを起点にアフリカに進出することは、イギリスとインドの間に進出することを意味しています。世界史が大英帝国対ドイツという形で第一次世界大戦に向かって不吉な展開を見せていくことの原因が、この東アフリカ植民地にあります。

ヴィルヘルム2世の拓いた「新航路」は危険水域に向かいます。ロシアの強さを知り、危険を避け、臆病とさえ評された外交政策をとっていたビスマルクが、ヴィルヘルム1世崩御により失脚すると、ヴィルヘルム2世は足早に帝国主義政策を推進します。ベルリンービザンチン(現イスタンブール)ーバグダードと、北海とインド洋を鉄道で結ぶ世界政策(3B政策)の始動。この政策は、西アジア進出を進めていたイギリスの3C政策(カイローーケープタウンーカルカッタ)との対立要因となります。国家がそれぞれ自国の総力を挙げて強国化をめざし、国家総力戦の時代に入ったのです。

■■ 強制収容という発想のもとは 植民地支配にあった

ドイツ東アフリカ植民地に目を向けたいと思います。ドイツの政治思想家ハンナ・アーレント(1906-1975年)の著書『全体主義の起源』(1951年)を読むと、強制収容所という発

(2) ドイツ帝国が成立した1871年頃に80万人だった人口は、第一次世界大戦が始まる頃には300万人へと膨れ上がっている。

(3) 10世紀頃から、アフリカ大陸内陸との交易基地として繁栄した。特に奴隷の積出港として有名で、地名はアラビア語で「黒人の島」の意。

想のもとがヨーロッパの植民地支配にあることがわかります。他国に進出して自分たちの商品生産に励んでもらうのは非常に都合のよいことです。商品といっても、見るからに高そうな商品価値のある希少商品ではなく、市民の日常生活に必要な大量生産商品を生産するためのプランテーション労働は矛盾だらけです。大量消費商品の生産は、ほとんど例外なく奴隷労働によってまかなわれています。たとえ奴隷という言葉の野蛮さがイヤで例えば賃金労働者と呼んでみても、実質は奴隷労働です。もしかしたら現代でも事情は変わらないのかも知れません。

いうことを聞かない現地労働者を隔離して集中的に収容するのが強制収容所です。この種の制度をヨーロッパの植民主義国は絶対に必要としました。強制収容が蔓延します。国外で植民地化が進むのと並行して、国内の植民地化も進みます。東アフリカ植民地で行われたことは、やがてドイツ国内の強制収容所でも行われます。ドイツ東アフリカ植民地でマジ・マジ反乱が起きました。ドイツは軍隊を出して鎮圧します。植民地叛乱に対して支配者側は鎮圧に焼土作戦を採ります。住民ごと焼き尽くす作戦です。これは経済的に見ておかしい。人口を減らして原住民を押し退けるなど経済的におかしいと、東アフリカの原住民政策にはドイツ本国からも異論が出されます。異民族支配の根底に潜む経済原理は、やがてナチスのユダヤ人絶滅収容所において貫徹されることとなります。

私たちが頭に入れておきたい問いは、ユダヤ人を収容する強制収容所は、いつ絶滅収容所になっていったのかです。反ユダヤ主義はヒトラーの『我が闘争』以来明らかですが、ユダヤ民族を絶滅させるという思想はここには現れていないようです。ユダヤ人を絶滅するという計画はどこからくるのでしょうか。

私たちがアウシュヴィッツなどのユダヤ人の悲劇を聞いている間に、もうひとつの惨劇

が進行していることに留意しなければなりません。ドイツにおけるユダヤ人の悲劇が、ユダヤ人のパレスチナ入植を容認させたのです。ヨーロッパに住む場所のないユダヤ人が、パレスチナに戻ってイスラエルという **national home** を作るのも無理もないと思わせます。

しかしシオニズムが、イスラエルはユダヤ人にとって昔ヤハウェという神がモーセに約束した国だと言う理屈は、ユダヤ人にしか通用しません。そのようなことが通用するならアラビア人のアッラーだって、何かしらの約束をしているはずでしょう。いや、そもそもこの土地はアブラム（アブラハム）の一行がエルサレムに到来する以前には、バアル（ウガリット神話で嵐と慈雨の神）が差配していた土地ではないか。

■ イエルサレム問題

問題は、エルサレムがユダヤ教・キリスト教・イスラーム教共通の聖地であることです。しかしこれらの宗教が本来的に敵対するものであると考える必要はありません。問題を難しくしたのはシオニズムでした。オーストリアのジャーナリストであるテオドア・ヘルツルから始まった、失われた祖国イスラエルを帰還するというシオニズム運動は、そもそもドイツ語圏の思想でした。シオニズムの公用語はドイツ語とイデュッシュです。この運動は、ユダヤ教、ユダヤ・イデュッシュ・イスラエル文化を復興しようとするユダヤ人の近代国家運動でした。

イデュッシュはヘブライ語表記を使ったドイツ語で、ドイツ語を使っている人間ならば、単語を 50 か 100 程度を使えばもののできる言語だともいいます。このドイツ語系のシオニズムは、ドイツに近い運動、親ドイツ的思想として展開しました。シオニズムの初期の目標は、イスラエルという新しい国家をウガンダに作ることでした。ヘルツルはドイツ

の押さえているタンザニアの隣ウガンダに土地を取得したい、とドイツ皇帝ヴィルヘルム2世に持ちかけていますが、一方、ロシアで迫害に遭っていたユダヤ人を味方に引き入れることは、ドイツに対して総力戦を展開しているイギリスにとっては絶対不可欠でした。それが、1917年、イギリスが大戦後にパレスチナにユダヤ人の **national home** の建設することを認めたイギリス外務大臣バルフォア宣言(バルフォアからロンドンのウォルター＝ロスチャイルドへの書簡)に繋がります。ロスチャイルドは、ヨーロッパにおけるユダヤ系財閥の代表であり、当時、シオニズム運動の代表も務めています。この宣言でイギリスは、ユダヤ国家の建設を求めるシオニズムに「いい顔」をすることによって、パレスチナでの対オスマン帝国(トルコ)戦を有利に進める上で、ユダヤ人の支援を取り付けることは絶対に不可欠でした⁽⁴⁾。

イスラームのアラビア人が腹を立てるのも無理なかつたのではないのでしょうか。パレスチナの土地は古来、ユダヤ人もキリスト教徒もイスラーム教徒も平和に共存していた土地です。しかしシオニズムの入植運動とともに、ユダヤ人憎しの運動が勃興します。イエルサレムの有力な名家出身で反ユダヤ主義者のアミン・フセイニーは、イエルサレムやシリアで過激な反ユダヤ運動を展開し、ユダヤ教徒を襲撃しては逃亡を繰り返しています。そのフセイニーがイギリスの「最悪の人選」によってイギリス委任統治領パレスチナの最高権威・最高ムスリム評議会議長に就任してからは、反シオニズムの運動を一層強化します。イギリス当局は結局フセイニーを国外追放の処分を下すのですが、イギリスと喧嘩別れを

したフセイニーが姿を現せる場所は限られています。枢軸国の日本の大使館がフセイニーの逃げ込む場所です。フセイニーは日本大使館を起点に枢軸国を渡り歩きます。まずイタリア、そしてドイツです。そして遂にヒトラーとの面談が実現します。

一杯のコーヒーを飲み交わすことで互いの安全を保証し合い、友誼を深めるのはスーフイズムの時代以来のコーヒー習俗です。しかし1941年11月29日、コーヒーを飲みながらフセイニーとヒトラーの間で交わされる語らいほど不気味な語らいは類を見ません。一方でヨーロッパのユダヤ人を迫害するヒトラー、他方にパレスチナからユダヤ人を追い出したいフセイニー。この二人が楽しく語り合う内容は決まっています。ユダヤ人迫害を徹底することです。

ナチス・ドイツのバルバロッサ作戦(ソビエト連邦奇襲攻撃)が予定通り進まないことがわかってきた時期です。モスクワはまたもや冬将軍に助けられたのです。しかしモスクワ侵攻が失敗してもバルバロッサ作戦は終わったとは言えません。戦場の舞台が雪深いロシアから、地中海に変わるだけです。次の重要戦場は北アフリカのエル・アラメイン。狙いはエジプトです。旧約聖書の昔、出エジプトを果たしたイスラエルの民はイエルサレムに徒歩で行ったのでしょうが、もしドイツが北アフリカを起点に地中海の制海権を握れば、エジプトとイエルサレムは文字通り目と鼻の先です。フセイニーはイエルサレムの水道に毒を捲くことを計画しています。フセイニーとヒトラーのお茶会は、まさにこうした戦局で楽しく和やかに持たれているのです。

フセイニーとヒトラーの「歓談」から2か月後の1942年1月20日、あの歴史に残る不気味なヴァンゼー会議が開催されます。ドイツの各省庁の次官級の高官が親衛隊大将ラインハルト・ハイドリヒのヴァンゼー湖畔の別荘に集まり、ユダヤ人問題の最終解決(絶滅計

(4) その一方でイギリスは、秘密協定であるフセイン＝マクマホン協定ではアラブ人の独立を認め、サイクス＝ピコ協定ではオスマン帝国領の分割をイギリス、フランス、ロシアの間で密約していた。それらと矛盾することとなり、大戦後のパレスチナ問題の原因を作ったともいえる。

画)の実行の手筈を整えた会議です。

会議の流れを受けて、アウシュヴィッツ強制収容所長にルドルフ・ヘスが着任します。そのヘスの生涯を描いた小説がロベール・メルルの『死は我が職業』(1952年発表)です。ヘスは大量の死体作成を生涯の職として生きた人間です。

■■ 強制収容所とコーヒー

戦争は徹底的に不経済な代物でありながら、いったん戦争を始めた国は戦争を徹底的に経済的に営まねばなりません。囚人を殺すにも経済原理は貫徹します。かつてはトラック一台分、50人ほどの囚人を処分するには、ガソリンの排気ガスを使っていました。しかし今は総力戦の最中です。ガソリンは貴重な動力資源であり、その一滴一滴が戦争の趨勢を決める死活問題であるため、ユダヤ人を殺すのに使うわけにはいかないのです。結局、落ち着いたのがチクロンBというシアン化合物系のネズミ駆除剤です。非常に安価な殺人方法です。

生きた人間を大量に「ガス処理」するにあたって、ヘスが入念に注意を払わねばならぬことがあります。ガス室に送り混む囚人がなにかことの異変に気づいて暴れ始めるようなことがあれば大変です。ヘスは部下にこう言わせています。これからシャワー室に入る。シャワーが終わったら、コーヒーを出すと。

強制収容所に本物のコーヒーなどあるはずがありません。しかしそれがどんな代物の代用コーヒーであったにせよ、コーヒーという言葉は聞いたそれぞれにかつての生活の記憶を呼び覚ましたはずです。コーヒーには故郷の音と香りが籠もっています。囚人達はしずかに物思いに耽りながら大人しくシャワー室に入っていったに違いありません。普段の生活習慣も守ったに違いありません。シャワーを浴びる人は、着物をキチンとたたみます。

無論、あとでまた着用するためです。これはナチス・ドイツお得意のエコロジーに役立ちます。強制収容所は、囚人が有する一切の価値——衣服から靴、髪の毛一本にいたるまで——がリサイクルに廻されます。

ナチス・ドイツの絶滅収容所で貫徹される死体作成の工程は実によく考えられています。本当にコーヒーが用意されているように見せかけるために、収容所の外壁には炊事車、今風に言えばキャンピングカーが用意されています。真面目に国家に奉仕する、一人のSS隊員の提案であったといえます。国家が総力を挙げて戦争をするような時代は国家の有するすべての分野の人々が全力を挙げて国家に奉仕することを強いられます。幼少時から英才を謳われるような軍人、化学者ばかりではありません。チクロンBを開発した人ばかりではありません。大豆から代用コーヒーを作ってナチス・ドイツの戦争経済に貢献した人も多いでしょう。ヨーロッパ全土からユダヤ人をアウシュヴィッツに送る輸送方法の確立に貢献する人もいるでしょう。膨大な数の死骸を処理する高性能の焼却炉を作り上げた人もいるでしょう。みなそれぞれが国家への貢献を果たしています。

さきほど名前を挙げたハンナ・アーレントはユダヤ人をそれぞれの強制収容所に送るに際して重大な国家貢献を果たしたアイヒマンの裁判を傍聴し、アイヒマンの「凡庸な悪」について書いています(『エルサレムのアイヒマン、悪の凡庸さに関するレポート』1963年発表)。私事ですが、アウシュヴィッツ強制収容所のルドルフ・ヘスも同様な人間だと思うのですが、中学生の時に彼の生涯を描いた小説『死は我が職業』を読んで、強い印象を受けて以来、わたしは国家総力戦にひた走る国家にだけは絶対に貢献すまいと決心して「我が職業」を勤め上げました。

■ 朝コーヒーを飲む普通の生活

コーヒーが飲めると思ってガス室に入っていくユダヤ人囚人を思うと、胸が締め付けられます。戦争が始まると、コーヒーを飲むことはもちろん、コーヒーを運搬する人もコーヒーを淹れる人も存在が危うくなる。戦争から帰って来ることができた人々が長い間夢見ていた故郷を実感するのは、女性の匂いとコーヒーの香りを嗅いだ時だとハインリヒ・ベル(1917-1985年)というドイツのノーベル文学賞作家が書いています(『戦争が終わったとき』1962年)。ベルは、ナチス時代から核弾頭ミサイル配備までの西ドイツの歴史を描き、戦争が普通の人々の生活に及ぼす、物質的、心理的な影響を作品に著した作家です。

最後に、アンナ・ゼーガースの『死者はいつまでも若い』(1949年発表)について一言だけ言わせて下さい。これは、ゼーガースがドイツ人にドイツの現代史を知らせるという意気込みのもと、メキシコで書き続けていた大長編です。キール軍港で勃発したドイツ革命に参加した兵士(エルヴィン)がベルリンのカフェで、そこに働く女給(マリー)と恋仲になるが、二人の間に子供(ハンス)が生まれたのを知ること知らないまま、反革命義勇軍に殺される。成人したハンスもまた、今度は第二次世界大戦末期、軍隊で出世した、かつての義勇軍兵士でハンスの父親を殺した人々によって殺される。ハンスにも恋人がいて、ハンスの子供を宿している。物語の軸は恐ろしく単純な人間模様の繰り返しですが、その単純な話がドイツからメキシコ、中国へと恐ろしく広い世界に広がってゆく壮大な現代史小説です。

しかしわたしが今、強調したいのは、コーヒーやカフェが舞台展開に利用されているということではありません。「死者はいつまでも若い」という特徴的な言葉がゼーガースによって使われた一番最初は『カリブ海の物語』

で、コーヒー農園で奴隷叛乱を企てて捕らえられ「魚の餌」とされた名もない黒人奴隷に対してであったということです。

わたしの舌は確な味覚を備えていないようで、飲むコーヒーに美味しいもマズいもなく、日々、毎朝、決まったコーヒーを飲むのが好きなだけの人間です。コーヒーを飲むと決まって同じ疑問が回帰します。コーヒー生産から奴隷制は廃止されたのか。コーヒーの歴史は嗜好品を作り出す人間が犬や魚の主食とされていた歴史でした。コーヒーを飲むと気分爽快、元気が出る感じはするのですが、コーヒーで一服してまた仕事に精出すにしても、その仕事はまた知らず知らずのうちに国家総力戦に荷担しているのではないかと。

わたしは毎朝決まったいつものコーヒーを飲むことだけが「日常生活の光と耀き」に溢れた贅沢と感じていますが、朝起きて、コーヒーを飲むつもりでテレビをつけたら核戦争が起きていたなんてことは不愉快です。そんな戦争の危機を事前に押さえて、大事な普通の日常生活を守るためには日本も戦争のできる「普通の国」にならうなどという風潮もまた不愉快でなりません。わたしは「今一杯のコーヒーが飲めれば世界がどうなっても構わない」(清岡卓行)という言葉が好きですが、わたしが世界の片隅で一杯のコーヒーが飲めるためには、世界はきわめて複雑精巧な存立条件を担保していなければなりません。

グローバルな世界流通を前提とする商品であるコーヒーの歴史は、世界の平和と安定を前提として近代世界と歩調を合わせてきました。しかし西欧を中心とする世界秩序は、反省すべき地点に達したようです。

最近、多国籍企業と戦う最貧国の西洋に対する心情を扱った『西欧への憎悪』(ジャン・ジグレル)⁽⁵⁾という本を読みました。著者は西欧の二枚舌を問題にしています。世界秩序の

(5) Jean Ziegler: *Der Hass auf den Westen*, München, Wilhelm Goldmann, 4. Aufl. 2011

形成をリードしてきた西欧の言説にはほとんど分裂症的な症候があると言います。西欧近代は人権や幸福権の追求を主張します。アメリカ独立革命もフランス革命もコーヒーとカフェの文明の精華であったと思います。しかしアメリカ独立宣言の起草者ジェファソンが死んだ時、ヴァージニアに広大な土地と200人の奴隷を遺産として残したことも現実です。第二次世界大戦後の1948年12月10日、国連世界人権宣言がジェファソン達の起草したアメリカ独立宣言に依拠して「すべての人間は生命と自由と安全の権利を有する」と宣言した時、人類の四分の三はまだ植民地主義の軛くびきに繋がれ、カンボジアのゴム・プランテーションの強制労働宿舎では子供たちが栄養失調とマラリヤで死んでいく現実があったことは西欧の二枚舌文明の一例でしかありません。毎年12月10日に人権デーが盛大に祝われても、この種の現実には一向に変化が現れません。自らが守ろうともしない人権擁護の理想的法律を定めて世界の近代化を推し進める能力がはたして西欧にあるのかが疑われ、「西欧への憎悪」ばかりが強くなっているというのです。

毎朝、コーヒーを飲みながら見るテレビがシリア難民や移民反対のヨーロッパ愛国主義の台頭を伝えています。わたしのたった一枚の舌は碌な味覚を備えていないのですが、西欧の二枚舌文明はわたしには不愉快でしかなく、わたしが毎朝の飲むコーヒーはますます苦みが増すばかりです。

(了)

白井 隆一郎／うすい りゅういちろう●1946

年生まれ。東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了。新潟大学教養部助教授を経て、東京大学大学院総合文化研究科教授、現在は東京大学名誉教授。専門は文化学、ドイツ・ヨーロッパ文化論、言語情報文化論。

2016年に『アウシュヴィッツのコーヒー コーヒーが移す総力戦の世界』(石風社)を上梓。25年前に出版され、今でも新しい読者を獲得し続けている『コーヒーが廻り世界史が廻る——近代市民社会の黒い血液』(中公新書)の続編とも。

他にも著書は『榎本武揚から世界史が見える』(PHP新書 2005)、『パンとワインを巡り神話が巡る——古代地中海文化の血と肉』(中公新書 1995)など多数。

* 本稿は、第15回嗜好品フォーラム(2017年5月13日、京都新聞文化ホール)における、記念講演「朝コーヒーを飲む普通の生活の世界政治——20世紀ドイツ文学の視座から」を改稿したものである。